中国の朝鮮戦争第一次、第二次戦役

——三八度線と停戦協議——

安田淳

第一章　問題の所在
第二章　第一次戦役
第三章　第二次戦役
第四章　第三次戦役の準備と三八度線の意義
第五章　中国の国連外交と三八度線の認識
第六章　結語

第一章　問題の所在

中国人民志願軍（以下、志願軍と略す）は一九五〇年一〇月一九日夜、密かに中朝国境を越え、北朝鮮へ入った。そして六日後の二五日、韓国軍との間に最初の戦闘が始まった。北朝鮮側にとって国連軍の仁川上陸後圧倒的劣勢にあった戦局は、その後の志願軍による第一次戦役（一〇月二五日～一一月五日）、第二次戦役（一一月二五日～一二月二四日）によって大きく転換し、国連軍を三八度線まで押し戻すこととなった。さらに志願軍は一二月三一日から第三次戦役を発動し（～一九五一年一月八日）ソウルをも陥落させて北緯三七度線まで最南下したが、その後国連軍の反撃は激し

さを増し、一九五一年五月には三八度線付近で膠着状態に陥った。そして同年七月一〇日、六月二三日の国連ソ連代表マリクの和平提案に基づき中朝側と国連側との休戦交渉が開始されるのである。

一九五〇年代の中国の安全保障を考察する際に、中国の朝鮮戦争介入を避けて通ることができないことは改めていうまでもないが、これまでの諸研究のほとんどはその介入決定過程の解明に焦点を当ててきた。しかし介入を決定し、実行した中国が次に直面するのはどのようにこの戦争を展開し、どのように終結させるかという問題である。このことを分析することなしにこの時期の中国の安全保障構想や対外認識を結論づけることはできない。そこで本稿はこれらの問題について、とくに第三次戦役直前までの段階を対象に分析を試みたものである。第一次戦役、第二次戦役が中国にとって順調に推移したこと、しかしその中では志願軍の多くの問題が露呈し、毛沢東と彭徳懐との確執が生じたことはこれまで言及されてきた通りである。(1) 第二次戦役後毛沢東が三八度線を越えることを督促したのに対して、彭徳懐が不満を持っていたことを示唆する中国側資料も見られるようになった。(2) だが実際にこの両戦役が中国にとってどのような過程を経て進展して行ったかについて、ようやく最近中国側から資料が不十分ながら明らかにされ始めたばかりであり、まだ本格的な研究はなされていない。またこの過程において、国連や英国等から停戦協議の申し入れは行なわれたが、中国はこれらすべてを拒否し続けている。第三次戦役終了後、中朝側にとって最も戦況が有利であった際に国連の停戦提案を拒否したのは一面当然であったとしても、それまでの過程を明らかにしなくては、中国の強硬姿勢やその後の休戦交渉受け入れの要因を十分に理解することはできない。なぜならば、一九五一年七月に始まる朝鮮戦争の休戦交渉は、「中断したり継続したり、戦闘しながら交渉するという複雑な」過程であった(3)からである。

そこでまず、比較的順調に推移した第一次、第二次戦役を検討することから始めたいと思う。

第二章　第一次戦役

一九五〇年一〇月一九日夜、志願軍は三方向から北朝鮮へ入った。すなわち、第四〇軍は安東（現在の丹東）から球場、徳川、寧遠地区へ、第三九軍は同じく安東及び長甸河口から主として亀城、泰川地区へ、そして第四二軍及びそれに続く第三八軍は輯安（現在の集安）から社倉里、五老里地区及び江界へという経路であった。志願軍の当初の目標は、専ら韓国軍「数個師団を殲滅」することであり、そのことによって朝鮮半島情勢が中国側に有利となると認識されていた。[4] 志願軍が韓国軍と交戦することで、「元山・平壌線以北の山岳地区に朝鮮の根拠地を獲得」し、「朝鮮人民を奮起させる」ことができると考えられていたということは、まず劣勢で追い詰められた北朝鮮軍の勢力回復を意図したのである。志願軍総司令員彭徳懐は志願軍が平壌・元山線以北の山岳地区に進攻することでその地域を確保すれば、米韓軍の北上を止め、その間に装備を整え訓練をほどこす時間を獲得できると考えたようである。[5] まず米軍との交戦を避け、韓国軍との戦闘のみに限定しようとしたことは、志願軍の準備不足からでもあったであろうし、[6] また米軍の主力はまだ三八度線にとどまっていたからでもあったであろう。毛沢東は、国連軍が北上する戦機を捉えて参戦し、その北上を止めることに大きな意義を見出したと同時に、しかし直接米軍と交戦する前に十分な時間を必要としていたのである。[7]

だが韓国軍の進軍速度は速かった。一〇月二〇日、朝鮮半島西部戦線では志願軍が予定した防御地区まで九〇キロから一三〇キロの地点にまで韓国軍が迫り、東部戦線ではすでに予定地区まで到達していた。毛沢東は一〇月二一日、彭徳懐等関係者に対して初めて具体的な配置を提示した。また毛沢東は、その作戦は追撃を含めて七日間から一〇日間かかると見積もっていた。[8] さらに毛沢東は同日、第一三兵団司令部を志願軍司令部に改組することを伝える電報の中で、迅速な軍事行動を求めた。[9] その結果、志願軍司令部は二一日二一時、当初の配置を変更した。[10] 毛沢東がこうし

て迅速な軍事行動を求めたのに対して、彭徳懐も一〇月二二日に毛沢東へ宛てた電報の中で、「機動は速ければ速いほどよい」と応えている。[11] そして第三九軍あるいは第四〇軍の一部が妙香山、杏川洞線へ進出すること、第三九軍、第四〇軍主力は温井、雲山線から東へ進攻すること、第三八軍は杏川洞から寧辺、徳川を攻撃すること、第四二軍は迅速に長津に集結することが決定された。[12]

しかし中国の基本的な戦略、すなわち一定地域を獲得して時間をかせぎ、反攻の条件を整えるという方針に変更はなかったようである。彭徳懐は一〇月二二日二二時に中央軍事委員会へ宛てた電報の中で、「半年間のわが軍の基本方針は、長津、熙川、亀城以北の山岳地区と長甸河口、輯安、臨江線の渡河交通を維持し、時間を勝ち取り、反攻条件を準備することである」と述べている。[13] これに対し、毛沢東は「貴殿の方針は穏当であり、われわれは穏当な基本点から出発しなければならず、できないことはやらない」と同意した。[14] ここで毛沢東は、第一に突発的に韓国軍数個師団を全滅させられるか、第二に敵の航空攻撃でどのくらいの被害が生ずるか、第三に米軍が師団を増援する前に韓国軍、米軍各数個師団を全滅させられるかどうかという三点が戦局を決定すると指摘した。そしてそのことは「今後数カ月以内に経験が得られるし、証明される」と述べていることから、毛沢東は韓国軍数個師団を迅速に全滅させる戦術の背後で、比較的長期的な戦略をたてていたことが推察される。興味深いことに毛沢東は、大都市とその周辺以外の「地方の敵はわれわれによって各個に殲滅されるであろうし、たとえ米国がさらに数個師団を増援したとしても、われわれはこれを各個に殲滅することができる。そうなれば米国にわが方との外交交渉を行なうように迫る可能性がある」と述べている。実際の交戦以前から米国との外交交渉をすでに想定しているのである。その後も韓国軍の迅速な機動に対応すべく、毛沢東の指示が続いた。[15]

一方韓国軍や国連軍はまだ中国の参戦を察知していなかった。[16] 志願軍はその状況を利用し、隠密裡に行軍を進めていた。[17] ただしその速度は夜間の徒歩による行軍であったことと、山岳路が狭隘であったことから遅々としており、一

○月二五日早朝の段階でも予定作戦地区までまだ二〇キロから五〇キロを残していた。[18] 一〇月二五日一七時に発せられた毛沢東から彭徳懐等への電報で、「敵はすでにわが軍に気づき始めた」との情報がもたらされた。同日七時頃、韓国軍第一師団の先頭部隊が、雲山から温井へ至る道路において志願軍第四〇軍第一二〇師団とついに戦火を交え、また同日一〇時頃、同じく韓国軍第六師団の先頭部隊が、温井から両水洞地区へ北進したところで志願軍第四〇軍第一一八師団からの攻撃をうけたのである。[19] こうして志願軍による実際の戦闘行動が開始された。志願軍には前述した四個軍に、二個軍（第六六及び第五〇軍）[20]が加わり、合計六個軍約二六万人が投入されていた。[21] 同日二一時、彭徳懐は中央軍事委員会に対して若干の戦術変更を建議している。[22] 緒戦はかなり混乱したものであり、必ずしも策定方針通りにいかなかったことが推察される。これに対し毛沢東は一〇月二六日一四時に承認を与えた。[23] また毛沢東はここで、「わが軍の最初の戦役は上述した韓国軍三個師団の殲滅を目標とすること」であり、「その後改めて米英軍と戦闘する」ということも再確認した。同日五時に毛沢東は、第三八、三九、四〇軍に米英軍との戦闘を回避するよう指示していた。[24] やはり韓国軍との戦闘に加えて国連軍とも同時に戦火を交えることを憂慮していたのである。[25]

一〇月二六日午後、彭徳懐は志願軍緊急党委員会を召集し、「カギとなるのは各軍が戦機を捉え、大胆に突進して敵を包囲殲滅できるかどうかである」と述べた。[26] 二七日一三時、彭徳懐から各軍へ具体的な配置が命じられた。[27] 毛沢東はこれにただちに同意した。[28] 一〇月二八日夜、志願軍は行動を開始し、まず第四〇軍主力が温井から東へ展開した。第三八軍は熙川の敵を米軍と誤認したため戦機を逃し、その後遅れて熙川から南の球場へ展開した。第三九軍は雲山の韓国軍第一師団を三方向から包囲し、第六六軍は亀城以西の地区へ展開した。第五〇軍は安東及び輯安の二手にわかれて後方の安全確保を担当することとなった。こうして志願軍は、一〇月三〇日までに古軍営洞、塔洞、泰川、雲山、温井、熙川を結ぶ線上に展開を完了したのであった。一〇月三〇日二〇時、毛沢東は彭徳懐に対し、戦役展開が完了したことを承認した。

一一月一日九時、彭徳懐から戦闘命令が発せられた。[29] 同日一七時、まず第三九軍が雲山攻撃を開始し翌二日朝までに同地を占領した。この戦闘は、志願軍が劣勢の装備によって近代的装備を有する米軍を「初めて殲滅した」戦闘であるといわれる。[30] 第四〇軍は一一月一日夜、寧辺へ進攻したが、韓国軍第一師団に阻止され、寧辺包囲は完遂されなかった。第三八軍主力は一一月一日一八時に球場を占領した後、さらに清川江左岸に沿って前進し、二日一八時には院里地区を占領した。第六六軍主力は亀城以西地区において米軍第二四師団の進攻を阻止した。こうしてみると戦況は中国にとって比較的順調に進展したが、一一月二日一九時、毛沢東は彭徳懐等に宛てて「半月以内に任務が達成できれば大変良い」と述べていることから、[31] ある程度の時間がかかることを覚悟していたと推測できる。ところで第三八軍は第三九、第四〇、第六六軍が主として北西地区から韓国軍、国連軍を阻止、追撃するのに対して、北東方向から、すなわち側面から深く進入し、敵を南北に分断した上、さらに平壌付近にまで南進するよう求められていた。つまりこれは前述したように平壌地区にいた米軍四個師団を脅かすという使命があったということであり、毛沢東はこのことを戦略的に非常に重要であると考えていたと思われる。一一月三日、韓国軍、国連軍は航空機、火砲、戦車の掩護の下で撤退を開始した。彭徳懐は各軍に対して「いかなる方法を取ってでも迅速に敵を捕捉し、逃がすな」と命じると同時に、第三八軍に対しては改めて「敵と後方との連絡を切断せよ」と命じた。だが第三八軍は指定された地点へ到達できず、敵の大部分を捕捉し得なかった。[32] 国連軍、韓国軍主力は四日までにほとんど清川江南岸まで後退した。

ここにおいて一一月四日一五時、彭徳懐は戦役の「終了」を中央軍事委員会に報告した。[33] ここで彭徳懐は「この戦役の勝利は、朝鮮北部の人心を安定させ、わが軍を安定した基盤の上に立たせ、戦闘の継続を堅持することにとって有意義である」と評価しつつも、全般的に情況が困難であることを指摘した。この指摘は後述する彼の総括報告に反映される。これに対し毛沢東は一一月五日一時、彭徳懐へ返電を送付し、「貴殿の措置に同意する。直面する情況を考慮して決定してほしい」と述べた。[34] しかし他面で、当面の方針を次のように規定した。すなわち、「わが軍は必ず

元山、順川鉄道以北の区域に戦場を設定し、その区域で敵の兵力を消耗させ、問題を元山、平壌線の正面に据えなければならない」と。このことは、毛沢東はやはりなお平壌を脅かすことに戦略目標を置いていることを示している。またここで毛沢東は、「徳川、球場、寧辺以北、以西の区域を後方とすることは、長期の作戦に有利である」とも述べている。前述したように、毛沢東は今後の作戦は長期に及ぶことを予測していたのである。ちなみに陳雲は一一月一五日の第二回全国財政会議において、戦争発展の可能性について「隣国では戦争をし、国内は爆撃される」ことを予測し、翌年の財政経済活動方針を長期的な戦争の遂行に置くべきであると主張している。[35]

毛沢東の一一月五日の電報に対して彭徳懐は一一月八日一五時、中央軍事委員会に宛てて電報を発し、「わが方は鋭気を養って疲労した敵兵を待ち、また後方の補給に便利なように、なお敵を深く誘い込み各個に殲滅する方針をとる」こと等を伝えた。[36] また彭徳懐は、第九兵団が合流して敵を誘い出した際には、第三九、第四〇、第六六軍を集中して徳川及びその以南へ進攻させるつもりであり、「戦場を前進させることは、持久戦に有利である」と述べている。彭徳懐も基本的に前述した毛沢東の戦略に同調しているといえる。したがって毛沢東も翌九日、「ただちにこれにしたがって着実に実行してほしい」と返電した。[37] また毛沢東はここで「今月から一二月初めまでの一カ月以内に東西両戦線でそれぞれ一、二回の戦闘を行ない、合計で敵七、八個連隊を殲滅し、戦線を平壌、元山間の鉄道線区域まで押し進めれば、わが軍は基本的に勝利したことになる」と記し、その戦略目標と時間をさらに具体的に明示した。このことを毛沢東はスターリンへ宛てた電報において、「私の観察するところでは、朝鮮の戦局は変化させることができる」と記し、中国側が攻勢に転ずる見通しを示していた。[38]

一一月一三日、彭徳懐は大楡洞で志願軍第一回党委員会拡大会議を召集し、「入朝作戦第一次戦役の基本総括及び第二段作戦方針」と題する報告を行なった。彭徳懐はここでまず「入朝作戦最初の戦役はすでに基本的に終了し、勝利した」と宣言しながらも、「今回潰走させた敵は多いが殲滅した敵は少なかった。その客観的原因は、時間が慌た

だしく、準備が不十分であったこと、山岳密林で、道路に不慣れであり、言語も通じなかったこと、敵が散開していて捕虜にし難かったことなどである」と分析した。[39] そして彼は、「以上のこうした客観的原因以外に、その主要な原因はやはり戦術的な欠点である」と厳しく断じた。さらに彼は「若干の重要な幹部は敵を過大に評価し、大胆に敵の退路を断ち切ろうとせず、袋のネズミとなった敵に全て逃げられてしまった。また分散してむこうみずに進み、安定していない小部隊の敵の攻撃に対して強大な敵が死守する陣地に対する攻撃方法を取り、時機を失した」と述べた。ここで批判の対象となったのは、第三八軍と第六六軍であった。彭徳懐は「この両軍がうまくやらなかったため、戦役全体の敵退路を遮断する包囲計画の目的が達成できず、このため敵二、三個師団を殲滅できるという戦役計画は未完成である」と、その怒りをあらわした。他方で彼は今回の勝利の意義は、第一に「朝鮮北部の戦局を安定させ、友軍に収拾し整頓訓練する時間をあたえた」こと、第二に「志願軍の朝鮮北部における基盤を固めた」こと、第三に「新たな経験を得た」こと、第四に「正義の戦争という影響力を拡大し、勝利への自信を深めた」ことを挙げた。彭徳懐は部隊の戦術行動を部隊指揮官として厳しく批判し是正を求めたと同時に、中央の政策決定とその措置を政治的に高く評価した。したがって当面の軍事指導方針についても、「運動戦、陣地戦、遊撃戦を相結合」させ、「優勢な兵力、火力を集中して敵を分割し、それぞれ包囲し、各個に敵を殲滅する」という戦法をなお採用すると述べると同時に、「統一戦線政策」、「正確な合理的負担の財政政策」、適切な「粛正政策」、「正確な捕虜政策」、「群衆規律と群衆工作」もまた必要であると強調した。それだけにこうした政治的側面にもさまざまな問題や障害は生じていたことが推測される。[40] さらに彭徳懐は今後の対応に関し、敵がまだ進攻してくる可能性は高いとみて、「もしわれわれが彼らと対峙するならば、休息、整頓、訓練の時間を得ることはできない」と判断する。[41] 彭徳懐のいう休息、整頓、訓練は、将来の大規模反攻のためのものであった。そのためにはさらに戦線を押し進め、敵を圧倒しておく必要があるというのである。したがって彼は、「われわれは将来大挙して反攻するために、今年中にもう一回交戦し、戦場を平壌、元

山地区へ押し進め、改めて敵の少なくとも六、七個連隊を消滅させ、敵を進攻態勢から防御態勢へ転じさせなければならない」と述べた。前述したように、毛沢東が戦線を平壌、元山地区まで進めることを指示していたことと関連して、彭徳懐は将来の大規模反攻に備える休息等のために戦線を同地区まで進めようと構想していたことに留意しておきたい。これに対し毛沢東は、米、英、仏には「悲観的な雰囲気が立ち込めている。わが軍がたくさん勝ち、数万の敵軍を殲滅しさえすれば、国際情勢全体が変化し得るであろう」と大きな展望を記している。[42] ここに毛沢東と彭徳懐とが、さらに戦闘を続行し[43]戦線を押し進める点では一致していても、その意図するところに微妙なズレがあることが読み取れるのである。

第三章　第二次戦役

こうして志願軍は、第二次戦役の準備に着手し、一一月二一日一八時、彭徳懐から各軍に対してその作戦方針が提示された。[44] 西部戦線においてはいったん清川江以南まで撤退した韓国軍と国連軍が一一月七日から再びその北西岸である長新洞、古城洞、龍山洞、寧辺及び龍門山、寺洞線まで進出していた。国連軍総司令官マッカーサーは空軍に対して大規模爆撃を命じた。このような情況下でまず、志願軍の後続部隊として第九兵団の第二〇、第二六、第二七軍が輯安、臨江から秘密裡に鴨緑江を渡り、東部戦線での作戦任務に赴いた。ここに志願軍第一線は九個軍四五万人（うち戦闘兵員は三八万人）を擁することとなった。[45] そして前述した二一日一八時の命令により、北東から南西へ流れる清川江中流の東岸において、第三八軍は主として球場を目標に、第四二軍は主として寧遠、徳川を目標に進攻し、第四〇、第三八軍は寧辺、博川、龍山洞まで前進し、第四二軍は清川江東岸で退却する敵の側翼を攻撃するよう配置された。

この配置は翌二二日二三時の電報でさらに目標を絞り込まれ、とりわけ西部戦線左翼の第四二軍と第三八軍は二五日夜攻撃を開始し、徳川地区の韓国軍第七、第八師団を全滅させるよう命じられた。[46]これに対し、一一月二三日二一時毛沢東は彭徳懐等に宛てて返電を発し、若干の補足、修正を指示した。[47]その主旨は翌二四日七時に彭徳懐から第九兵団に宛てられた電報に転載されており、[48]志願軍司令部はこれを受け入れたものと思われる。

同じ二四日、マッカーサーは有名な「クリスマス攻勢」を宣布した。この時彭徳懐は、「魚を釣り上げるには、魚に旨いところを食いつかせなければならない。マッカーサーはこれまで負けたことがないとホラを吹いているが、結局のところ誰が誰を食い去ることができるか、今回の戦役を見ていろ」と語ったという。[49]翌二五日夜、志願軍は反撃を開始した。志願軍は「故意に弱腰なところを見せ、敵をなすがままにしておいて驕り高ぶらせ、深くおびきよせる戦術を取った」といわれる。[50]予定通りまず第三八、第四二軍が徳川、寧遠地区の韓国軍第七、師団を攻撃し、翌二六日夕刻には第七師団を、また同日払暁には第八師団をほぼ壊滅させた。毛沢東は一一月二八日、「韓国軍第二軍団主力を殲滅させた大勝利を祝す」旨の電報を発している。[51]ここで毛沢東は、米軍三個師団を殲滅させることが当面の任務であるとし、そうしさえすれば「全ての局面は非常に有利となる」と述べた。

第四〇軍は第三八軍に協力し米軍第二師団を攻撃したが、第二師団は南へ潰走してしまったため、敵の分割という任務を果たし得なかった。このため彭徳懐は第四二軍に対し、第三八軍に協力して南へ潰走する敵の阻止を命じた。この徳川、寧遠地区での戦果を受けて、一一月二七日夜、第九兵団は東部戦線でも攻撃を開始した。第三八軍第一一三師団は同じ二七日夜、七〇キロを長駆して偕川、平壌幹線道路上の要衝である三所里を攻撃し、翌二八日朝にはここを占領した。米軍の騎兵第一師団は平壌から援軍に駆けつけた英軍第二九旅団とともにこれに猛攻撃を加えた。これに対して志願軍も西部戦線五個軍をこの安州、軍隅里、三所里で囲まれる三角形の地域へ向けて展開させた。彭徳懐は一一月二八日一三時、西部戦線各軍に対しこの地域への前進を命じたのである。[52]また第四二軍は左翼からずっと

南を迂回し、安州方向から南へ退却する敵の遮断を命じられた。なお彭徳懐は、第四二軍の一個師団に対し順川攻略後、順川南の慈山の米軍第九軍団指揮所を攻撃し、これに成功すれば平壌へ向かってさらに進攻するよう命じた。ここで初めて彭徳懐の目にも、平壌がいわば射程距離に入ったといえよう。この命令の末尾で彭徳懐は、「この戦役は朝鮮戦局との関係が極めて大きく、一切の困難を克服し、これを巨大な代価と引き換えるよう希望する」と述べ、この戦役の意義を強調した。これらのことから、部隊の疲労回復と兵站補給の必要性のための第二次戦役という意義を考えていた彭徳懐も、志願軍の快進撃に朝鮮戦争全体の情勢を転化させるという積極的意義を考慮するようになったと推測できる。

東部戦線（小白山以東）においては、マッカーサーによる「クリスマス攻勢」の命令によって国連軍が長津湖へ進攻した。これに対し志願軍は第九兵団による三方からの包囲作戦を構想していた。一一月五日に江界、長津方面を全面的に担当することになった宋時輪率いる第九兵団[53]は、米軍陸戦第一師団の殲滅を命じられていた[54]。具体的な配置は一一月二四日七時に彭徳懐から命じられた[55]。第九兵団は実際には二七日夜、長津湖以南の敵に対して攻撃を開始した。だがこの兵団はもともと華東の長江以南地区に駐屯していたため、朝鮮半島東北部の酷寒に適応せず、凍死する者や凍傷にかかる者が続出したという[56]。この日も東部戦線では大雪となり、気温は零下三〇度前後にまで低下した[57]。おそらくそうした情況を憂慮した結果だと思われるが、彭徳懐は一一月二八日一五時、第九兵団に対して次のような電報を発した。すなわち、「米軍陸戦第一師団の全部あるいは大部分を殲滅した後、勝ちに乗じて咸興と新興へ進攻せよ。この両都市を攻略した後、朝鮮東北戦場における敵の陸路交通を全て遮断すれば、米軍、韓国軍を海路三八度線まで撤退させる可能性がある。第九兵団は咸興、新興地区で越冬（原語では「過冬」）してもよく、（そこならば）気候は黄草嶺西北よりずっと温暖である」と。ここで彭徳懐は第九兵団の任務達成後は、寒冷な黄草嶺北西部にとどまらずに温暖な咸興、新興で越冬することを許可したのである。

これに対して同日深夜、毛沢東はその配置を「大変正確である」と承認した。[58] たしかに毛沢東はこの戦役の意義を重大に受け止め、非常に重視していた。しかし他面で彼は、いかにして犠牲を少なくするかに配慮し、準備不足が第一次戦役ですでに露呈していたことを考慮して、戦闘間の小休止や戦闘の分割を提起した。

だが、東部戦線においてこの一一月二八日には国連軍の猛反撃が開始された。長津湖の東、南、西でそれぞれ反撃が始まり、激戦は翌二九日払暁まで続いた。たとえば第二七軍の第八〇師団はいったんは新興里まで突入したものの、兵力の不足と凍傷者の増加により撤退を余儀なくされた。第二〇軍第八九師団は南下の途上、社倉里で米軍第三師団第九連隊に阻止された。これらの戦闘の結果、米軍の勢力は四個連隊、一個戦車大隊、三個砲兵大隊の合計一万余人がまだ残存しており、それは志願軍が見積った兵力の二倍であった。[59] 二九日も米軍の猛反撃は続行され、一二月一日午後になってようやく南へ撤退を始めた。このように東部戦線で志願軍は必ずしも順調に戦闘を遂行できず、戦車と航空機に掩護された国連軍の抵抗は激しかった。

そして一一月三〇日、毛沢東は彭徳懐等に電報を発し、「冬の間休息するというスローガンは出さないように」と指示した。[60] この指示が意味するところはこれまでに公表された資料を見ても必ずしも明らかではない。たしかにこの戦役が朝鮮半島情勢の重要な転機をもたらすと考えていた毛沢東が、困難な情況に直面した前線部隊に対する彭徳懐の配慮を抑制したと読み取れる。戦闘による死傷者は三万人であったのに対し、凍傷による減員は五万人にのぼったといわれる。[61] ここから北京の毛沢東と現地の彭徳懐との認識の差異、あるいは確執の発端を推測することができる。しかしもう一つの可能性は以下の通りである。前述したように彭徳懐の第九兵団に宛てた電報の直後にこの「冬の間休息する（原語では「過冬休息」）というスローガンを禁じる毛沢東の電報が発せられたことから、この時期に彭徳懐から前線の各部隊に対し越冬に言及した何らかの指示が発せられていた。その指示がどのようなものであったかわからないが、ただし彭徳懐のこれまでの認識や命令から見て、それは必ずしもただちに戦闘を停止し、冬の間休息に入

るよう命じたとは思われない。他方、非常に重要な戦機を迎えて士兵を鼓舞する際に、毛沢東は越冬については言及しない方が好ましいと考えたのであり、彭徳懐等現地指揮官が部隊の休息、整頓を必要と認識していたことを否定するものではなかったとも考えられる。そのことは毛沢東がこの電報で続けて次のように述べていることから明らかである。すなわち、「しかし二つの戦役の間では必要な休息、整頓、訓練をせよ。こうした整頓、訓練は情況が許しさえすれば一カ月前後の時間を取ってよい。もし情況が許せば延長することもできる」と。毛沢東は情況に応じた一定の休息期間を設けることに同意し、その決定は彭徳懐等に委ねたのである。

一一月三〇日夜、第二七軍の第八〇、第八一師団主力の反撃開始によって翌一二月一日から国連軍は退却を始め、一二月二日には東部戦線最西端の社倉里からも南へ後退した。国連軍にとって平壌以北の東部戦線と西部戦線とを結ぶ連携がなく、その間には九〇キロもの間隔があったため、「平壌防衛構想は根底から崩れ」たのであった[62]。第九兵団司令部は後退する敵を包囲殲滅するよう改めて命じたが、中国側資料も認めるように、志願軍はこれを十分に包囲できなかった[63]。こうして国連軍は続々と南東方向へ退却し、咸興及び沿岸の興南を目指した。一二月九日は朝鮮人民軍が咸興南方の元山を占領していたため、国連軍はこれ以上陸路を南へ退却することが不可能となった。第九兵団の第二六、第二七軍は朝鮮人民軍第三軍団とともに追撃を継続し、一七日には咸興を占領した。退路を断たれた国連軍は海上輸送による退却を図り、二四日一六時、志願軍は興南地区及び沿岸地区を占領した。東部戦線の第二次戦役はここに終了した。

一方、西部戦線では一一月三〇日、「戦闘の最も激烈な一日」を迎えていた[64]。国連軍は一〇〇機以上の航空機や四〇〇門以上の火砲を投入して包囲突破を図った[65]。第三八軍第一一三師団は同軍主力の南にあって、南へ包囲突破を図る国連軍を阻止し、このため国連軍は西へ退いた。第四二軍がこれを追撃し、一二月一日夜には清川江下流南岸の安州を占領した。こうして国連軍はついに平壌を中心とする地域へ撤退した。同日、彭徳懐は追撃命令を下したが、自

動車化された国連軍の撤退速度は速かった。そのため中央軍事委員会は一二月二日、彭徳懐等へ宛てて電報を発し、「わが西部戦線の各主力軍は粛川、順川以北の地区で位置を調整し、四日乃至五日休息し、態勢を整え、食糧弾薬を補充し、引続き戦闘する準備を行ない、東部戦線に協同して、戦果を拡大せよ」と命じた。[66] これに基づいて彭徳懐は同日、その追撃を停止させた。[67]

同じ一二月二日、毛沢東は彭徳懐等に対し、主力がさらに平壌、元山線を攻撃する可能性について質した。[68] さらに毛沢東は一二月三日、彭徳懐に対し、食糧等の現地調達が可能かどうか、大同江が結氷しているならば氷上を通行可能かどうか調査するよう命じた。また同時に毛沢東は高崗に対し、新安州と満浦の両地点から平壌へ至る二本の鉄道を利用して軍需物資を平壌地区へ輸送できるかどうか調査するよう命じた。[69] これらは、毛沢東が平壌への進攻を積極的に考慮していた証左である。

だが志願軍の猛攻撃によって平壌まで退いた国連軍は、さらに平壌を放棄し三八度線まで撤退しようとしていた。このとき志願軍の進攻は止っていた。それにもかかわらず国連軍の潰走は止まらなかった。一二月四日一三時、毛沢東は彭徳懐等に宛てて「平壌の敵は撤退を準備している模様である」ので、「南浦、平壌、三登の線まで接近して威力偵察を実施し、情況を観察せよ」と命じた。[70] さらに彼は「もし平壌の敵がすでに撤退していたら、三八度線へ進攻せよ」と述べた。毛沢東の構想では平壌の奪回を越えて、三八度線への進攻に意義を見出したといえよう。彭徳懐は同日一八時、毛沢東へ宛てて、戦術に関する電報を送付したが、それは来るべき平壌攻撃を想定してのものであったと考えられる。この一二月四日、国連軍はまさに平壌からの撤退を開始した。毛沢東は深夜になって正式に平壌への攻撃命令を発した。[71] これに対して彭徳懐はその三〇分後、ただちに返電し、すでに三個師団を南進させて平壌を威嚇し、敵の意図を探っていると述べた。[72] ここで興味深いことに彭徳懐は、もし敵が平壌を固守するようであれば、さらに主力を南進させてソウルを威嚇するとまで通告しているのである。また彼は「もし敵が平壌、元山線を放棄した時

には、わが方は三八度線を越え、機を見てソウルに進攻する」とまで積極的な姿勢を見せた。公開されている資料を見る限り、毛沢東もまだこの段階ではソウル攻略には言及していない。翌五日七時、中央軍事委員会は、「その通り実行してほしい」とこれを承認した。[73] 中央軍事委員会は同時に前に触れた戦術に関する彭徳懐の建議を了承した。

新華社は一二月六日電として朝鮮人民軍と志願軍は「六日午後二時、平壌に入った」と報じた。[74] 主戦線たる東部においては平壌の占領をもって実質的には第二次戦役が終了したといえる。これにより問題は第三次戦役をどのように発動するかということに移るのである。

第四章　第三次戦役の準備と三八度線の意義

一九五〇年一二月初め、金日成は北京を訪問し毛沢東と会談した。これについて詳細は公表されていないが、一二月五日七時の毛沢東の彭徳懐等宛電報に、「金日成はすでに朝鮮へ帰国した」[75]とあるから、一二月四日までには帰国していたと考えられる。この会談で双方は「中朝両軍連合司令部を組織することを決定」した[76]以外、何が協議されたか明らかでない。だが柴成文・趙勇田『抗美援朝紀実』の一二月四日の項に興味深い記述がある。すなわち、「毛沢東は当時、以下のように考えていた。朝鮮戦争はすぐに解決する可能性もあるが、しかし長引く可能性もあるので、われわれは少なくとも一年間戦うつもりである。敵は停戦を要求してくるかも知れないが、米帝国主義は朝鮮からの撤退を承認し、かつまず三八度線以南へ退かなければならず、そうしてこそ停戦の交渉を行なうことができるとわれわれは考えている。現在志願軍はまず韓国軍を殲滅しているが、これは米軍の撤兵を促進することにとって有効である。米帝国主義がもし撤兵を承認するならば、国連は中ソが参加するという条件の下で、全朝鮮人民が国連の監督下に自らの政府を選出するべきだと主張することに同意するであろう」と。このことがわざわざ一二月四日の項に記さ

れているということは、この日かあるいはその直前に行なわれた毛沢東と金日成との会談でこうした考えが表明されたと推測される。ここからは、まず国連軍を三八度線まで退かせるべきこと、それはさらに米軍を朝鮮半島から撤退させるための第一段階であること、米軍が完全に朝鮮半島から撤兵したならば、国連の監視の下、朝鮮全土における総選挙を実施するべきことを毛沢東は構想していたことがうかがわれるのである。

一二月一三日、毛沢東は彭徳懐等に対し電報を送って、「現在米英各国はわが軍に対し三八度線以北で停止するよう求めており、それによって軍を整頓し再び戦うのに有利にしようとしている。このためわが軍は必ず三八度線を越えなければならない。もし三八度線以北で停止するならば、政治的に非常に不利となるであろう」と述べた(77)。毛沢東は米英に対し政治的に有利な地位を占めるため、ただちに三八度線を越えることが重要であると考えていたということができよう。このことは後述するように、国連での停戦をめぐる動きに密接に関連していた。彼は、たとえ国連軍がソウルを放棄してもソウルを攻略せず、開城、平壌間で一定期間休息、整頓するよう求めた。志願軍にとってやはり大規模なソウル攻略作戦はもはや当面不可能な状態であったことを毛沢東も認めたことになる。また、ソウルに志願軍を一定期間置くことに補給上の困難があり、国連軍が再び仁川上陸作戦のような後方への上陸、補給線の遮断を企図するという危険があることを毛沢東は感じていたと考えられる。

彭徳懐等志願軍首脳は、この指示を予想に反したものと感じたようである(78)。実はこの電報の五日前の一二月八日、彭徳懐は毛沢東に対し、「暫時三八度線を越えて戦闘せず、準備を十分に行ない、来年春に戦闘を再開する」旨を建議していた(79)。第二次戦役終了直前には「ソウルに進攻する」とまで積極的な姿勢を見せた彭徳懐は、その四日後に正反対の消極的な態度に変化した。その変化の原因の一つは、おそらく一二月八日に開かれた志願軍党委員会会議で、前線の指揮官からさまざまな部隊運用上の問題が報告されたことにあったと思われる。この会議において、国連軍は三八度線に約二〇万人の兵力をまだ配置している以外に毎日志願軍後方の補給線を空爆しており、食糧弾薬の補給は

夜間の「突貫輸送」に依拠していることが報告された。この会議の議論に基づいて同日に彭徳懐は毛沢東へ建議したと考えられる。

ところが彭徳懐は一二月一五日二二時、各軍に対して「敵が三八度線を境界として残存部隊を再び整え、戦闘再開を準備する陰謀を粉砕するために、毛沢東主席の命令により引き続き三八度線以南へ前進し、ソウル、原州、平昌線以北の地区において米軍、韓国軍の一部を殲滅することに決心した」と伝えた。[80] ソウルはまだしも、以東の原州、平昌といえばさらにややソウルより南へ下がった線上にある。彭徳懐は、一二月一三日付けの毛沢東からの電報によって彼に同調したのである。ただし第三八軍は、敵情を偵察するため偵察支隊を組織し、一二月一二日に三八度線へ進軍を開始することを決定している。[81] 彭徳懐がこのことを承知していないとは思われないので、すでにこの頃には三八度線越境の可能性を探っていたのかもしれない。彭徳懐自身も、「二回目の戦役に勝利したわれわれは、勝利の勢いに乗じて追撃し、一二月中旬にはすでにひそかに三八度線に接近していた」と述べている。[82] 彭徳懐はさまざまな考慮を重ねた末、「軍事は政治に服従しなければならない」との考えの下に、一二月一五日、志願軍首脳と協議の上三八度線を越えることに決心したのである。[83]

西部戦線に関して毛沢東は一二月一七日の電報で、小規模な戦闘の実施を指示したが、[84] これは部隊の疲労と損害とを考慮した結果であったであろう。しかしそうした小規模戦闘の後に毛沢東は「最後の決戦」となることを想定していた。いずれにしても毛沢東は終始彭徳懐等に対して「貴殿等の意見はどうか、知らせてほしい」と述べて、現地の意見具申を尊重する姿勢を見せていた。

彭徳懐は一二月一九日二四時、長文にわたる電報を中央軍事委員会へ送った。[85] ここで彭徳懐はまず、第九兵団を咸興で越冬させ、二カ月間の休息を与えること、第二に楊得志部隊（第一九兵団）を一九五一年二月に北朝鮮領内へ入れ、三月に戦闘に投入すべく思想教育を含めた準備を強化すべきことに言及した。ここから彭徳懐は、戦争がまだ三

カ月以上継続するであろうと認識していたことがうかがわれる。そのことは第三に彼が、西部戦線の各軍は損害が大きく、装備も劣勢であってその困難な情況は前進するほど増大しており、早急に解決しなければ戦争は必ずや長引くであろうと述べていることと関係している。そして彼は第四に、「私の見るところ、朝鮮戦争はなお相当長期にわたり、苦しいものである」と断定する。さらにまた次のようにも述べた。すなわち、「政治的に言っても、敵がただちに朝鮮を放棄することは、帝国主義陣営にとって非常に不利であり、英、仏も米国に対してそうするように要求はしないであろう。もう一、二回敗北し、二、三個師団が殲滅されれば、数個の橋頭陣地（釜山、仁川、群山）に後退して守勢をとるかもしれないが、それでもただちに全てが朝鮮から撤退するはずがない」と。このように彭徳懐は、三八度線を越えることに政治的意義を見出さなかった。それゆえ彼は八日に、毛沢東に対して三八度線を越えて戦闘を行なうことに反対したが、しかし「一三日の返電を受け取った後、現在はすでに三八度線を越える作戦に従う。万一のことがなければ、敗北することはあり得ないが、攻撃を阻まれ勝利があまり大きくない可能性は存在する」と留保条件を付けた上で三八度線を越えることに同意した。その留保条件は次のように続く。すなわち、四個軍を集中させて敵左翼の韓国軍第一師団をまず殲滅し、機を見てその右方の同軍第六師団を攻撃する。もし戦役が順調に展開すれば、さらに春川の韓国軍第三軍団を攻撃するが、順調でなければ適時後退するというのであった。そして彭徳懐は「三八度線を制圧できるかどうかは、その時の具体的な情況を観て決定するべきである」との意見を具申した。彭徳懐としては毛沢東の意思を尊重し、まず段階的に韓国軍を攻撃し、その結果によって三八度線を占領するかどうか判断したいという譲歩案を示したといえよう(86)。

これに対し一二月二一日、毛沢東はほぼ全面的にこれを受け入れた。また毛沢東は「韓国軍全部かあるいは大部分を殲滅できさえすれば、米軍は孤立し、長期にわたって朝鮮に留まることはできなくなる。もし米軍数個師団をさらに殲滅できれば、朝鮮問題はさらに解決しやすくなる」と述べた。一二月一一日に彼は、米軍が朝鮮半島から撤退し

ようとしているとの情報を得ていると彭徳懐に知らせた。[87] 米軍が長期にわたって朝鮮半島に留まることができないという判断は、こうした情報に基づいたものであると考えられる。また毛沢東は「もし順調でなければ撤退し、適当な地点で休息、整頓を行なってから戦闘を再開するというこの意見はもっともである」と述べた。彭徳懐が強く主張したように、第二次戦役までで非常に疲弊した部隊を毛沢東も懸念していたのである。だが毛沢東はここで三八度線の政治的意義についてなお次のように主張する。「米、英は現在人々の中に存在する三八度線の旧来の印象を利用し、その政治的宣伝を行ない、かつわが方を停戦に誘い込もうと企図している。したがってわが軍はこの際、三八度線を越えてさらに戦闘を行ない、その後に休息、整頓することが必要である」というのである。「旧来の印象」とは、朝鮮戦争開戦以前には三八度線が南北朝鮮の境界線であり、この線までを回復したからには停戦に応じるべきであると米、英が主張することを意味していると思われる。そうした印象が広まる中で、国連軍に決定的な打撃を与えることなく、米、英主導で停戦交渉に持ち込まれることを毛沢東は嫌ったのである。二一日の電報にあるように、彼は「主導権はわが方にある」と確信していた。それ故にここで三八度線を越えることは、停戦交渉を中国側主導で開始するためにどうしても必要な条件であったのである。

彭徳懐がこの毛沢東の意思をどこまで理解したかはよくわからないが、翌二二日に事実上の三八度線越境命令を発した。[88] この命令を追うようにして二四日、毛沢東から彭徳懐に対し、敵は三八度線から三七度線の間に安定した防衛線を築いており、こうして敵を集中させておくことは各個撃破にとって有利であるから、今回の戦役後は一歩後退して敵に防衛線を築かせるようにという指示がもたらされた。[89] 毛沢東はあまりに敵を深追いすると、敵は三七度線以北に防御線を築かないばかりか、ソウルの米軍さえもソウルを放棄し、大田、大邱一帯まで退いて集結するかも知れず、そうなると来春の志願軍の攻勢にとって不利であると説明した。したがって「全軍主力は今回の戦役後、数十キロ後退して休息、整頓を行ない、米軍、李承晩軍に安全だと思わせ、その防衛線を回復させなければならない」というの

である。同時に彼は、「戦争はなお長期的な準備が必要であり、今後の多くの困難な情況を見積もらなければならない」とも述べた。これらのことから考えられることは、毛沢東は志願軍部隊が困難な情況にあったことは理解し休息、補給が必要であることは認識した上で、しかし朝鮮戦争の政治的解決のためには最低限の条件として三八度線を占領する必要があると確信していたのである。彼はこのことが政治的解決に有効に働かなかった場合、翌年春以降の大規模な攻勢を構想していたと思われる。彭徳懐が毛沢東へ譲歩案を示したことは前に触れたが、毛沢東の側も彭徳懐の措置に妥協的な姿勢を見せていたのである。(90)

ちなみに食糧等の現地調達について言及した電報は前に触れた。一二月三〇日、彭徳懐は毛沢東を経て金日成に送付した手紙の中で、食糧等の現地調達とその償還方法について具体的に提案した。(91)食糧等の現地調達が前線において一つの問題となっていたことは間違いないと思われるが、一二月二六日の毛沢東から彭徳懐等への電報にこれに関連すると思われる記述がある。それは今回の戦役後の休息、整頓に際し、「規律を整え、中国の同志と朝鮮の同志との関係を改善し、軍隊と民衆との関係を改善し、住民民衆工作をうまく処理する」べきだと記している点である。(92)ここから推察するに、補給の困難による現地調達や、それをめぐる中朝関係に問題が生じており、その早急な解決が必要であったのであろう。

志願軍指導部は「綿密な討論を重ねた上で」、一二月二八日、毛沢東に対し次のように打電した。まず彭徳懐は「貴殿の先日の電報で、今回の戦役後、三八度線はなお敵に占領させておくと記されていたが、しかし今回の戦役の結果を観なければならない」と述べる。(93)だが前述した二六日付けの毛沢東の彭徳懐等へ宛てた電報では、敵には三七度線から三八度線の間の防衛線を回復させたうえで、それらを各個に殲滅させよと述べられているのであって、三八度線そのものを敵に占領させておけとは指示されていない。毛沢東の電報は、攻撃後は「適当な地区」まで撤退せよと曖昧な表現を用いている。これは毛沢東にすれば現地の指揮官の判断に委ねたと言えようが、彭徳懐はこれを再び

三八度線以北へ撤退せよと解釈したのである。したがって彭徳懐は、さらに「今回の戦役では部隊に政治動員を行ない、三八度線を越える意義を強調しているが、三八度線を占領した後、再び三八度線が不要だとするには、さらなる解釈が必要である」と述べる。ここで彭徳懐はわざわざ三八度線の意義について、「実際にはその政治的意義は小さい」と批判している。ここに毛沢東と彭徳懐の認識の相違が顕在化したと言えよう。ただ彭徳懐は、「私の考えでは、占領したからにはもし特別の理由がなければこれを占領し、ソウルには行かずにそこは敵に占領させておくべきである。もし平壌と同様に、敵が自らソウルを放棄したならば、朝鮮人民軍第一軍団を向かわせて占領させ、志願軍は四乃至五個軍（第九兵団を除く）を集結して三八度線以北へ撤退し、整頓、補給する。この部署はどうか、返電を請う」と請訓した。毛沢東は翌二九日、彭徳懐等に対し、「貴殿の計画に同意する」と返電した[94]。ここで毛沢東は三八度線について再び次のように説明している。すなわち、今回の戦役が順調に展開するならば、「各軍は戦役が完全に集結し、敵の新たな配置も明らかになった後、食糧補給に便利な地区（三八度線南北を問わない）に分散し、二カ月間の休息、整頓を行なう」とし、部隊の補給が第一であって、三八度線占領にはこだわらないことを示唆している。つまり、この戦役の目的は三八度線をいったん越えることであり、「人々の頭の中に存在するいわゆる三八度線の旧イメージは、この一戦を経れば存在しなくなる。わが軍が三八度線以南あるいは以北どちらで休息、整頓するかは関係ない」のである。毛沢東はさらに続けて、「しかしもしこの一戦を行なわず、一二月初めから冬の間全部を休息、整頓し動かなければ、かならず資本主義各国の憶測を招き、民主戦線にもまた納得しない者が出て、多くの議論を引き起こすであろう」と、その政治的意義を説明した。

こうして一二月三一日、志願軍による第三次戦役が開始される。毛沢東はこれによって志願軍に有利な情況を作りだし、政治的解決を図ろうと考えていたように思われる。それが達成できないときには、翌年春の大規模攻勢を準備しようとしていたのである。

第五章　中国の国連外交と三八度線の認識

一一月八日、国連安全保障理事会は、中華人民共和国代表（以下、中国代表と称す）を出席させて朝鮮半島問題を討議することを否決したが、他方、マッカーサーの提出した「特別報告」の討議にのみ中国代表の出席を招請することになった。[95] このマッカーサーの「特別報告」とは、同月六日に彼が提出したもので、志願軍の参戦を「外国の干渉」であると非難したものであった。これに対し一一日、周恩来は安全保障理事会に電報を送付してこの出席招請を拒絶した。だが同時に周恩来は安全保障理事会に対し、中国政府の提訴する米国の台湾武力侵略問題と、米国の朝鮮武力干渉問題とを合わせて同時に討議するよう要求した。[96] 周恩来は国連に対する外交交渉を拒絶したわけではなかったのである。同日、中国外交部スポークスマンは声明を発表し、[97] マッカーサーの「特別報告」と八日の安全保障理事会における米国代表の報告に厳しく反駁した。この声明の大部分は志願軍の軍事行動を正当化することに当てられているが、他方で中国は、「朝鮮問題を平和的に解決するためには、まず第一に外国軍をいっせいに朝鮮から引き揚げ、朝鮮問題は南北朝鮮の人々自身で解決させるべきである」と主張した。このことは、同月四日に発表された「各民主諸党派の連合宣言」にも記されている。[98]

一一月二三日一四時、中国外交部副部長章漢夫は駐中国インド大使パニッカーと会見した。この席においてパニッカーは、英国外務大臣ベビンの態度に変化が見られるとして二つの見解を提示した。[99] 第一に、英国政府は中国の朝鮮問題における利益を承認すること、第二に、中国代表団が国連臨時本部に到着後、朝鮮問題を討議するよう希望すると提議していることであった。章漢夫はパニッカーにインド政府の見解を質したが、パニッカーは「安全保障理事会には中国が参加しなければならず、そうしてこそ朝鮮問題を討議できる。英国側の提起した二点は非公式協議の発端である」と答えた。だが中国はこれを米国が探りを入れたものと理解し、取り合わなかったようである。[100] なぜならば

この時期、戦場においてはマッカーサーの「クリスマス攻勢」の号令によって国連軍の配置が行なわれようとしていたからであり、また一一月六日からは大規模な空爆が実施されていたからである。他方、同時に志願軍の第二次戦役の準備も最終段階を迎えていた。

一一月二七日、中国は九月二九日の国連の招請に基づき、台湾問題を討議するために代表伍修権を特派し、国連政治委員会に出席させた。ここに至る経緯は次の通りである。これよりさきの九月二九日、中国から提出された台湾問題に関する米国への制裁および撤兵要求を討議するため、国連安全保障理事会は中国政府代表団を出席させることを決定した。中国政府はこれを検討した結果、代表団を特派することに決定し、一〇月二三日、公式にこれを受諾した。[101] 中国はやはり国連における意思表示の意義と重要性とを十分に認識し、この決定を下したと思われる。中国の国際社会にたいする外交努力はここに始まったといってよい。ところが前述したように、一一月八日、国連安全保障理事会は、中国代表を出席させて朝鮮半島問題を討議することを否決した。周恩来はただちにこの決議を非難し、出席要請を取り消したことも前述した通りである。だが伍修権等中国代表団はこの時期国内にあって、周恩来の指導の下、準備作業に多忙を極めていた。主要な発言は全て起草、審査され、その翻訳文も用意されつつあった。[102] 中国は一面で国連の出席要請を自ら拒否し、強硬な姿勢を示しつつ、他面で実質的には国連出席のために着々と準備を続けていたのである。したがって伍修権等はやはり国連に赴くことになり、代表団は一一月二四日、ニューヨークに到着した。同じ二四日、国連政治委員会は中国代表を出席させ、米国の「侵略」を提訴する中国案の討議に参加させることを決議した。[103]

一一月二八日午後、伍修権は国連安全保障理事会で二時間にわたり演説した。[104] 伍修権の演説はまず、国連における中国の合法的地位が認められるべきであることを強調した。次に伍修権は大部分を割いて、米国政府が台湾を「武力侵略」していることを繰り返し提訴し、台湾が中国の領土であることを主張した。さらに伍修権は米国の「朝鮮に対

する武力侵略」に言及し、米国はベトナムを含めて「アジアに対する支配を強めている」と非難した。最後に彼は、以下の三点を安全保障理事会に提議した。すなわち第一に、「米国政府の台湾武装侵略と朝鮮武装干渉の罪行に対し、公然と非難し、かつ具体的にこれを制裁する措置を採ること」、第二に、「ただちに有効な措置を講じ、米国政府に台湾からその武装侵略手段を撤収させること」、第三に、「ただちに有効な措置を講じ、米国及びその他の外国軍ともに朝鮮から撤退し、朝鮮の内政は南北朝鮮人民によって自ら解決させ、そのことにより朝鮮問題を平和的に処理すること」であった。[105] これを毛沢東は「伍修権は天宮を大いに騒がせた」と楽しそうに評したという。[106] こうして中国の姿勢は国際的に明示されたのである。

ところで前述したように、毛沢東と金日成との会談が北京で行なわれたと推測される一二月四日、毛沢東は「もし米帝国主義が撤兵を承認するならば、国連は中ソが参加するという条件に同意し、全朝鮮人民が国連の監督下で自らの政府を選出することを主張するかも知れない」と考えていた。だが朝鮮半島からの国連軍の全面的撤退という中国の期待は破られた。一二月七日、中国外交部副部長章漢夫はインド大使パニッカーと会見した。ここでパニッカーは章に備忘録を手交し、インド等アジア・アフリカの一三カ国が提出しようとしている提案について次のように語った。[107] インドの基本的な提案は、「まず三八度線で停戦することにより、協議を実施する」ことであり、「インド政府は数日以内に安全保障理事会にこの提案を提出するつもりである」と。またパニッカーは、第三世界の総意として、三八度線を越えないよう、そうすれば中国を支持する大きな勢力を得ることができるであろうことを中国に進言したのである。パニッカーは、中国を含む関係諸国の討議による以外には紛争の拡大を防止する方法は存在しないと判断していた。[108]

これに対し翌一二月八日、中国外交部アジア司司長陳家康は駐中国インド大使館参事官カウルと会見し、パニッカーが前日に提起した一三カ国提案を事実上拒絶した。その三日後、周恩来はパニッカーと会見し、インドの提案に対

して、「問題のカギは米国であり、現在までのところ、米国あるいは国連が朝鮮問題の平和的解決を希望している具体的な意思表示は見られない」と語った。また周恩来は、「米国はすでに三八度線を越えたので、三八度線はマッカーサーによって破壊され、もう存在しない」とも述べた。そして周恩来は「朝鮮問題と東方の平和問題は不可分のものである」と強調し、中国の「米帝国主義」に対する強い対決姿勢を明確にした。ここでは三八度線というものの意義を周恩来は自ら「もう存在しない」として否定したかのごとくである。しかしすでに検討したように、当時毛沢東は米軍を三八度線以南へ退かせることが、朝鮮半島から完全に撤退させるための第一段階であると認識していた。この頃、志願軍が三八度線を越えるべきかどうかについてまさに検討中であったといわれる。[109] 一三日に毛沢東は、三八度線を越えることを彭徳懐に命じている。周恩来は一〇月二四日、中国人民政治協商会議第一期全国委員会第一八回常務委員会において行なった報告の中で、「米軍が仁川に上陸する以前、われわれは、米帝国主義が三八度線を越えた後に停止し、その後外交交渉に移行しうるかどうかをすでに考慮したことがある」と述べている。[110] 外交交渉のための三八度線の意義はすでにこの頃から認識されていたのである。したがって周恩来はパニッカーとの会見において本心から三八度線の意義を否定したのではなく、むしろ三八度線の意義を一三カ国提案によって再確認し、その意義を十分に理解した上で、中国の強い姿勢を示すための外交戦術としてこう語ったと考えられる。

一二月一二日、インド等一三カ国は停戦三人委員会の設立を提起した第一提案を国連総会に提出し、一四日、国連総会は五一票の賛成多数で採択した。こうして総会は、朝鮮停戦三人委員会を成立させ、朝鮮問題の協議において満足できる停戦の基礎を確定することを決議した。[111] 国連総会議長でイラン代表のエンテザーム、カナダ代表ピアソン、インド代表ラウから構成されるこの停戦三人委員会は翌一五日、国連に特派されて来ていた中国代表伍修権を通じて、停戦のための討議に応ずる用意がある旨のメッセージを周恩来へ送付した。[112] 伍修権は翌一六日の記者会見の席上、台湾から米軍を撤収させること、国連における中国の地位と発言力とを認めること、朝鮮半島から一切の外国軍隊を撤

収させることを主張した。そして伍修権は、「今回の国連安全保障理事会は米英集団が操り、わが国による極東問題の平和的解決についての基本提案を拒絶したが、われわれはなお極東問題の平和的解決に精一杯努力するつもりである。さらに、朝鮮人民軍とともに余儀なく実施させられている米国侵略軍へ抵抗する軍事行動が、早急に終結するよう中国人民志願軍に対し何とかして勧告したいと思う」と述べた。[113] こうして中国から三つの条件が提示されたと解釈できる。伍修権は志願軍の「軍事行動が、早急に終結するよう何とかして勧告したい」と述べたが、その条件を提示することによって、停戦か戦闘続行かの選択を国連に迫ったということができる。その条件は三八度線に全く言及していなかった。だがそのことこそが、中国が三八度線を重視し、その越境を確定したことを示していると考えられる。すなわち、中国は三八度線の意義を外交的に認識し、それだからこそ三八度線にはあえて外交的に言及せずに、軍事行動をもってその越境という行為を外交に有利に反映させようとしたのである。

周恩来は一二月二二日、「米国が侵略に失敗してから停戦に賛成する」のは、「一息入れる時間をかせぎ、再戦を準備し、少なくとも現有の侵略陣地を保持し、再進攻を準備できるようにするため」であると声明を発表した。[114] 周恩来はまた、「われわれは、全ての外国軍が朝鮮から撤退し、朝鮮の内政は朝鮮人民が自ら解決するという朝鮮問題の平和的調停交渉の基礎を堅持する。米国侵略軍は台湾から撤退しなければならず、中華人民共和国の代表は国連における合法的地位を獲得しなければならない」と述べた。これはまさに同月一六日に伍修権が記者招待会で語った三条件を繰り返したものであった。

このように、外交的には三八度線で停戦し和平交渉に入ることを強く求める動きに対し、中国は、これは三八度線を旧来と同様に境界とすることを政治的に承認するに等しく、「以後朝鮮問題を徹底的に解決するという政治目標に影響を与える」と考えるようになった。[115] それはまさに「(第二次)戦役の結果が中央軍事委員会と毛沢東が志願軍の出国前及び第二次戦役前に構想したことを遙かに越えた」ためであったといわれるが、[116] 中国が積極的に「米帝国主義」

との対決を意図して介入したという目的[117]からすれば、それは当然のことであったと考えられる。

第六章　結　語

以上の分析から明らかになったことは次の通りである。

準備不足のまま参戦した中国は、まず韓国軍を攻撃することに限定し、国連軍との戦闘を回避することで時間を稼ごうという方針であった。それは戦争の比較的長期化を想定した戦略であったが、しかし同時にその戦略には当初から米国との外交交渉も含まれていたと思われる。だが現地指揮官の彭徳懐は、次第に露呈する志願軍の損害と欠点に、早くも第一次戦役の段階から休息、補給の必要性を認識するようになっていた。

第二次戦役は、毛沢東が戦局を一転させるものとして発動したのに対し、彭徳懐は休息、補給を確実にするために戦線を押し進めておくとして実施した。国連軍と韓国軍の総退却が幸いし、補給線への空爆や圧倒的な火力に悩まされながらも志願軍は快進撃を続け、一二月六日には平壌を占領した。中朝国境を越えてからわずか一ヵ月半で志願軍は北朝鮮をほぼ回復させたわけである。戦争の長期化を想定していた中国としては、その後の戦略を早急に策定する必要に迫られた。その最も重要な問題は、三八度線をどうするかである。

志願軍が三八度線を越えるべきかどうかについては、国連をめぐる外交闘争が大きく影響していたと思われる。毛沢東は一二月七日の周恩来・パニッカー会談とその後の国連における一三ヶ国提案決議によって、三八度線を越えることに、さらに明確な政治的意義を確信するようになった。つまり毛沢東は、国連が三八度線を境界とする停戦交渉を呼びかけたということは、この三八度線を越境することによって中朝側は政治的に有利な立場に立てると考えたのである。毛沢東としては従来から積極的に「米帝国主義」と対決することを決意していた以上、中朝側主導による優

位な停戦交渉を始めるためにも、三八度線を越える必要があったのである。ただしそれはそのまま決戦に持ち込むための戦役ではなく、その後に予想される「最後の決戦」の前哨戦という位置付けであった。毛沢東にとって「最後の決戦」の意味するところは、中朝側に有利な情況で始まる政治交渉ということもありえたし、それが実現できない場合のより大規模な軍事的攻勢ということもありえたと考えられる。

だが彭徳懐は毛沢東のこうした三八度線の政治的意義を認めなかった。彭徳懐が国連をめぐる外交闘争をどこまで承知していたかは明らかでないが、これは現地の指揮官としてはやむを得ないことであったろう。しかし彭徳懐は留保条件を付けた上で、三八度線越境作戦に同意した。彭徳懐は、毛沢東も戦争の長期化を予想し、翌年の大規模攻勢を構想し、そのための休息、補給が必要であることを認めていたという共通の戦略方針を確認することによって、三八度線越境に妥協したのである。

このように中国参戦後の朝鮮戦争初期の段階にあっては、中国は現実の戦闘と、外交闘争の両面から三八度線の意義ないしは重要性を認識するようになった。すなわち、志願軍の行動と補給にとって三八度線は重要な限界であったし、停戦交渉を始めるに当たっての有利な地位を獲得するためにも三八度線は重要なラインであったのである。この経験と認識は、中国が一九五一年初頭にさらに強硬な姿勢を打ち出す契機となったとともに、その後志願軍が進撃を続けた上で国連軍の反撃に遭い、中国が七月に本格的な停戦交渉を受け入れる際の基礎を形成したと考えられるのである。

(1) 後者の問題については平松茂雄『中国と朝鮮戦争』、勁草書房、一九八八年、一四一～一七一頁で論じられている。

(2) 《当代人物伝記》叢書編輯部編『彭徳懐伝』、当代中国出版社、北京、一九九三年、四三七～四三八頁。

(3) 林蘊暉、範守信、張弓『一九四九～一九八九年的中国　凱歌行進的時期』、河南人民出版社、開封、一九八九年、一八九頁。

(4) 『建国以来毛沢東文稿』第一冊（以下、『文稿』と略す）、中央文献出版社、北京、一九八七年、五五六頁。
(5) 同右、五五八頁。
(6) 拙稿「中国の朝鮮戦争参戦問題」、『軍事史学』第三〇巻第二号（一九九四年九月）、四〜二一頁。
(7) 『文稿』、五五八頁。
(8) 同右、五七五頁。
(9) 同右、五七七頁。
(10) 軍事科学院軍事歴史研究部編著『中国人民志願軍抗美援朝戦争戦史』、軍事科学出版社、北京、一九八八年、二二頁。
(11) 中国人民解放軍軍事科学院編『毛沢東軍事文選　内部本』、中国人民解放軍戦士出版社、北京、一九八一年、六八六頁。
(12) 『文稿』、五九一〜五九二頁。
(13) 前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六八六頁。
(14) 『文稿』、五八八〜五八九頁。
(15) たとえば同右、五九九頁、六〇一〜六〇三頁等参照。
(16) 同右、六〇四頁。
(17) 同右、五八二頁、五九四頁。
(18) 前掲『中国人民志願軍抗美援朝戦史』、二四頁。
(19) 同右、二六頁。前掲『彭徳懐伝』、四一七頁。
(20) 鄧礼峰『新中国軍事活動紀実　一九四九〜一九五九』、中共党史資料出版社、北京、一九八九年、一四一頁、及び李澄、暁季、王立兵主編『建国以来軍史百椿大事』、知識出版社、北京、一九九二年、六六頁。
(21) 寥国良、李士順、徐焰『毛沢東軍事思想発展史』、解放軍出版社、北京、一九九一年、三六四頁。
(22) 彭徳懐伝記編写組編『彭徳懐軍事文選』、中央文献出版社、北京、一九八八年、三二九〜三三〇頁。
(23) 『文稿』、六一〇頁。
(24) 同右、六〇九頁。
(25) 同右、六一二頁。
(26) 前掲『彭徳懐伝』、四一八頁。

(27) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三三〇～三三一頁。
(28) 『文稿』、六二二頁。
(29) 楊鳳安、王天成『駕馭朝鮮戦争的人』、中共中央党校出版社、北京、一九九三年、一三五頁。
(30) 前掲『中国人民志願軍抗美援朝戦史』、三二頁。
(31) 『文稿』、六四〇頁。
(32) 前掲『彭徳懐伝』、四一九頁。前掲『中国人民志願軍抗美援朝戦史』、三四頁。
(33) 前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六八七～六八八頁。
(34) 『文稿』、六四七頁。
(35) 「抗美援朝開始後財経工作的方針」、中共中央文献編輯委員会編『陳雲文選（一九四九～一九五六）』、人民出版社、北京、一九八四年、一一二頁。
(36) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三四四～三四五頁。
(37) 『文稿』、六五三頁。
(38) 『文稿』、六五八頁。
(39) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三三五～三四二頁。また江擁輝『三八軍在朝鮮』、遼寧人民出版社、瀋陽、一九九一年、七五頁も参照。
(40) たとえば前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六八九頁。軍事科学院軍事歴史研究部編『中国人民解放軍六〇年大事記（一九二七～一九八七）』、軍事科学出版社、北京、四九九～五〇〇頁。《当代中国叢書》編輯部編『当代中国的公安工作』、当代中国出版社、北京、一九九二年、三六四頁。『文稿』、六七八～六七九頁。
(41) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三四一頁。
(42) 『文稿』、六七二頁。
(43) 同右、六七三頁。
(44) 前掲『彭徳懐軍事文選』。三四五～三四六頁。
(45) 前掲『毛沢東軍事思想発展史』、三六五頁。
(46) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三四七頁。

(47) 前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六七二～六七三頁。
(48) 同右、六九〇頁。
(49) 元志願軍参謀長解方の談話記録、前掲『彭徳懐伝』、四二七頁。
(50) 《彭徳懐自述》編輯組編『彭徳懐自述』、人民出版社、北京、一九八一年、二五九頁。
(51) 『文稿』、六八七頁。
(52) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三四七～三四八頁。
(53) 『文稿』、六五〇頁。
(54) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三四二～三四四頁。『文稿』、六五七頁。前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六九〇頁。
(55) 前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六九〇頁。
(56) 前掲『彭徳懐伝』、四三三頁。
(57) 前掲『中国人民志願軍抗美援朝戦史』、六〇頁。
(58) 『文稿』、六八九頁。
(59) 前掲『中国人民志願軍抗美援朝戦史』、六一頁。
(60) 『文稿』、六九二頁。
(61) 前掲『毛沢東軍事思想発展史』、三六六頁。
(62) 白善燁『対ゲリラ戦』、原書房、一九九三年、一四二頁。
(63) 前掲『中国人民志願軍抗美援朝戦史』、六四頁。
(64) 前掲『彭徳懐伝』、四三二頁。
(65) 前掲『三八軍在朝鮮』、二一六頁。
(66) 『文稿』、六九六頁。
(67) この停止命令は、一二月一日に中央軍事委員会及び東北軍区司令部に宛てて出された電報において請訓され、翌二日五時に中央軍事委員会によって批准されたものと思われる。同右、参照。
(68) 同右、六九九頁。
(69) 同右、七〇七頁。

(70) 前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六八〇頁。
(71) 『文稿』、七〇九頁。
(72) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三五〇～三五一頁。
(73) 『文稿』、七一二頁。
(74) 『人民日報』、一九五〇年一二月七日。
(75) 『文稿』、七一二頁。
(76) 前掲『彭徳懐伝』、四三七頁。
(77) 『文稿』、七二二頁。
(78) 杜平『在志願軍総部』、解放軍出版社、北京、一九八九年、一四二頁。
(79) この彭徳懐の建議の詳細は公表されていないが、前掲『毛沢東軍事文選　内部本』に収録された一九五〇年一二月二一日付毛沢東から彭徳懐等宛電報の注釈の中で一部が言及されている。同書、六九二頁。また前掲『彭徳懐伝』、四三七頁参照。
(80) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三五五～三五六頁。
(81) 前掲『三八軍在朝鮮』、二四八頁。
(82) 前掲『彭徳懐自述』、二六〇頁。
(83) 洪学智『抗美援朝戦争回憶』、解放軍文芸出版社、北京、一九九一年、九九頁。
(84) 『文稿』、七二四～七二五頁。
(85) 前掲『毛沢東軍事文選　内部本』、六九一～六九二頁。
(86) 前掲『抗美援朝戦争回憶』、一〇〇頁。
(87) 『文稿』、七一九～七二〇頁
(88) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三五七～三五八頁。
(89) 『文稿』、七三三頁。中共中央文献研究室・中国人民解放軍軍事科学院編『毛沢東軍事文集』第六巻、軍事科学出版社、中央文献出版社、北京、一九九三年、二四九頁。
(90) 前掲『毛沢東軍事文集』、二五一頁の注釈参照。
(91) 『文稿』、七五九頁。

(92) 同右、七三四頁。
(93) 前掲『彭徳懐軍事文選』、三五九頁。
(94) 『文稿』、七四一頁。
(95) 馬斎彬、陳文斌他編『中国共産党執政四〇年』、中共党史資料出版社、北京、一九八九年、二五頁。
(96) 世界知識出版社編『中華人民共和国対外関係文件集第一集　一九四九～一九五〇』、人民出版社、北京、一九五七年、一七六頁。柴成文・趙勇田『抗美援朝戦争紀実』、中共党史資料出版社、北京、一九八七年、六四～六五頁。
(97) 前掲『中華人民共和国対外関係文件集第一集　一九四九～一九五〇』、一六八～一七〇頁。
(98) 中国人民抗美援朝総会宣伝部編『偉大的抗美援朝運動』、人民出版社、北京、一九五四年、三六頁。
(99) 前掲『抗美援朝戦争紀実』、六五頁。
(100) 柴成文・趙勇田『板門店談判』、解放軍出版社、北京、一九八九年、一〇三頁。
(101) 懐恩『周総理生平大事記』、四川人民出版社、成都、三四三頁。
(102) 伍修権『往事滄桑』、上海文芸出版社、上海、一九八六年、二〇三頁。伍修権『回憶與懐念』、中共中央党校出版社、北京、一九九一年、二五六頁。
(103) 前掲『板門店談判』、一〇八頁。
(104) 前掲『中華人民共和国対外関係文件集第一集　一九四九～一九五〇』、一九七～二一八頁。
(105) 前掲『抗美援朝戦争紀実』、六七頁。
(106) 前掲『板門店談判』、一〇八頁。
(107) 前掲『抗美援朝戦争紀実』、六八～六九頁。
(108) Henderson to Acheson, 7 November 1950, Department of State, *Foreign Relations of the Unitede States, 1950, Volume VIII: Korea* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1976), pp.1093-1095.
(109) 前掲『板門店談判』、一一四頁。
(110) 『周恩来選集』下巻、人民出版社、北京、一九八四年、五二頁。
(111) 神谷不二編『朝鮮問題戦後資料』第一巻、日本国際問題研究所、一九七六年、四八頁。前掲『抗美援朝戦争紀実』、七〇頁。

(112) 神谷不二『朝鮮戦争　米中対決の原形』、中央公論社、一九六六年、一一八頁。
(113) 前掲『中華人民共和国対外関係文件集第一集　一九四九～一九五〇』、二一九～二二一頁。前掲『抗美援朝戦争紀実』、七一頁。
(114) 前掲『抗美援朝戦争紀実』、七一頁。前掲『中国共産党執政四〇年』、二六頁。
(115) 徐焔『第一次較量　抗美援朝戦争的歴史回顧與反思』、中国広播電視出版社、北京、一九九〇年、六三頁。
(116) 同右、六一頁。
(117) 拙稿「中国建国初期の安全保障と朝鮮戦争への介入」、『法学研究』第六十七巻第八号（一九九四年八月）、三三～七〇頁。